

## [028] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339171>

---

出版情報 : 史淵. 28, 1943-02-20. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University  
バージョン :  
権利関係 :

# 彙報

## 第十三回九州史學會大會

昭和十七年度の九州史學會大會は六月六日（土曜日）の今津大泉坊見學と同七日（日曜）の講演會を行つた。

### 今津大泉坊見學

六日正午今川橋に集まる者約二十名、バスにて今津まで行き、大泉坊まで約半里を歩く。本坊は登志山誓願寺四十二坊の一にして榮西禪師が渡支前後に逗留した所、寺寶は國寶に指定されたもの多く次のやうである。紙本墨書法華經十卷、榮西自筆誓願寺孟蘭盆緣起一卷、蓋裏に「延祐二年杭州油局棟梁禪□橋金家造」と書かれた經篋一合、五代の吳越王錢弘俶が造り我國にも五百基配分せられたと傳へられ現存せるものは纔かに二基と言はれる中の一つである鐵製錢弘俶八萬四千塔一基、他に榮西所持の獨鈷・拂子等を藏す。なほ誓願寺建立緣起を載せるに次のやうである。

靈山東北日本鎮西太宰府邊志摩縣

### 今津□誓願寺創建緣起

夫天地無初而以造作法爲初世心法無體而以覺悟理稱體也無初無體之物猶論初論體乎有處有形之寺寧不謂起首乎所以誓願寺者依仲原氏太娘之願樂而所同宿僧寬智之建立也其女弟子歲始三十有四而深厭女身歎於五障之重常願佛質慕於九品之蓮爰係心於彌陀八萬之相海發丈六刻彫之誓凝思於淨利金繩之界道企方丈建立之願故號曰誓願寺也嘉應二年庚寅五月一日始發願結書表三種誓

一欲造丈六彌陀像二欲寫大般若妙典  
三欲供法華持者千人云其後承安元季辛卯十月日呼取周州小縣柚人某甲誂丈六御素木畢即宛行新米十三斛然後先二个度入山而不得真木及第三度蒙示現如夢教至到而見之正得真木是則彌陀之靈瑞先令現弟子之宿願終可遂之所致也同二季夏秋運材木九土支了同三季三月十八日庚戌尾宿火曜甘露辰奉斧始佛像了同五月三日甲午佛後光中檀那兩人姓名字彫付之首尾七十日之間佛師檀主共

精勤勇猛無障礙同月二十八日功畢同四季  
 八月二十四日戌寅星宿土曜甘露日堂斧  
 始之同五季改安元十月二十三日庚子輪宿日曜  
 甘露辰敬以遂供養素懷了脩前州日應山  
 入唐法師榮西囑之爲阿闍梨而申胎金兩  
 部合行之齋席于是立冬入月之後風雪不  
 靜不似倒季冬至之時然當余之日無風而卷  
 雲有耀而映映殆可謂春日乎道俗成市賢  
 愚澄心此即彌陀之靈驗揭焉檀那之信力所  
 招歎又大般若經一部六百卷請漢家之本  
 其日開題了供持者未滿大數乎凡厥伽藍  
 建立地相者于北峙高山堅塞夜又鬼門也  
 于南湛內海深澄八功德池也于東聳野岳  
 登拜明星出現也于西通洲濱既爲極樂土  
 道也前則有屋宅竝棟下化衆生之表示乎  
 後則有家漠繩人上求菩提之視摸乎東漢  
 青龍移此西土白蓮現此且依昔日之誓  
 願且任今世之結構遂一願濟万差干時  
 法師寬智齡五十有五歲仲原太娘得壽子  
 筭三十有九歲所生男子四人女子四人也  
 今爲傳後代錄緣起而已安元元季太歲乙  
 未十月二十五日壬寅

講演會並びに研究發表會

同七日午前十時より福岡市因幡町縣教育會館にて委  
 員長重松俊章教授の開會の挨拶の下に、午前中は有志  
 の研究發表、午後は講演が行はれた。稀に見る盛會で  
 社會人の歴史意識の向上著しいものがあることを示し  
 た。

研究發表會

一 明末滿洲のガンヤンの形態について  
 學生 江島 壽 雄

一 ランケの歐洲膨脹論  
 辛島 重 義

一 太宰府の衰退と博多  
 磯 貝 保 茂

一 獨逸歴史學派について  
 讚 井 鐵 男

一 興福寺の衆徒と衆中  
 鈴 木 止 一

一 眞木和泉守と久留米藩醫學  
 王 丸 勇

(以上の中、梗概の集りしものは次頁に掲ぐ)

講演會

一 ロマンテイクの歴史思想  
 九大助教授 新 開 長 英氏

福高教授

(梗概は雜誌「現代」十月號の同氏筆「世界的的人  
 倫の形成―大東亞史觀の構想―」を見られたし)  
 一 日本思想に於ける自然と當然  
 福岡勝也教授

(本講演は追つて「河野省三博士還曆記念論文集」に掲載の豫定)

## 晩餐會

午後五時より天神町昭和ビル内家庭食堂にて催す、食後、會員の近況報告あり、七時散會、會する者三十名に及び盛會であつた。

(井上記)

### 一、明末滿洲のガシヤンの形態に就いて

江島 壽雄

清の太祖の勃興期前後に於ける滿洲族の社會組織、經濟組織の單位をなすものはムクンとガシヤンとであるが、そのガシヤンは十戸内外の最小聚落たるフアルガ(街村形態)が幾つか結合したものであると云はれてゐる。今日我々はガシヤンに就いての明瞭詳細なる史料に接することは困難であるが、たゞ僅かにその手掛りを與へてくれるものとして申忠一の書啓と、滿洲實錄及び滿文老檔に散見するガシヤンに關する記事をもつのみである。

申忠一の書啓に擧げられた部落は大小様々であるがその中ガシヤンに比定し得るものを幾つか見出し得るその形態によつて分類すると大體次の様である。

一 三個か四個かの近隣の小部落が結合して形成さ

れてゐるものでその各部落に夫々防禦施設として堅固な木柵をもつ家が二三戸存在するもの。

二 一個の部落のみによつて一ガシヤンを形成してゐて、その部落中に前者と同じく堅固な防禦施設をもつ家が存在するもの。

三 一個の部落で一ガシヤンを成し、その部落の背後山地等に土城、石城等の防禦設備を有ちその中にガシヤンダの家族の住居があるもの。

四 ガシヤンの全戸が土城、石城等の中に住居するもの。

之等の形態はガシヤンの歴史的な發展過程を暗示してくれる様であるが、更にガシヤンの内部的構成とも關聯してゐるものと思はれる。

清朝創業期社會の研究、就中八旗の牛象制の研究には牛象への發展的組織への根幹的な集團としてのガシヤン研究は缺くことの出来ぬ一課題であると信ずる。

### 一、太宰府の衰退と博多

磯 貝 保 茂

中世に於て博多が商業都市として榮え、日鮮、日明貿易に於て當時唯一の國際港として繁榮し博多商人の能動的展開をみるに至り、多くの有力なる商人を輩出し、博多は我が貿易史上重要な位置を占めるに至る

のであるが、こゝに博多が中世に至つて商業都市としての地盤を確立するに至る契機に就いて考察せんとする次第である。古來對外關係に於て最も重要な策源地たりし博多は太宰府の創設をみるや、その外港として榮え、中央との密接なる關係を結ぶに至り内外交通の接觸地點として、地理的な好條件と共に外國貿易港として、日唐貿易、更に宋商人を中心とする宋及高麗との通商が盛んとなり、こゝに博多を外港とする太宰府貿易時代をみるに至つた。即ち博多に於ては鴻臚館を中心とする公的貿易が行はれるに至つたのである。かくて太宰府は「太宰府言、此府人物殷繁天下之一都會也」と云はれるに至つたのであるが、しかしかゝる状態は長くは續かなかつたのであつて平安時代に於ける律令制度の弛緩は延いて太宰府の衰退となり、こゝに太宰府はその本來の目的を失ふに至り太宰府を中心とする公的貿易も漸次その性格を私的貿易へと變質するに至つたのである。かゝる太宰府に於ける公的貿易の變質は當然その外港たる博多に於ける鴻臚館を中心とする公的貿易も又當然私的貿易へと變質せしめたのであつた。かゝる情勢に於ては多くの外國商人の渡來を招來し、律令制度の弛緩に依る鴻臚館貿易の私貿易化を更に助長せしめたのであつた。かくて宋及高麗の商人の博多を中心とする私貿易の展開をみるに至り、そ

の渡來も漸次頻繁となり鴻臚館所在の福岡へ着岸せる外國船も漸く博多、宮崎方面へ出入するに至つたのであつて、こゝに此等多數の外國商人を相手とする博多商人の擡頭を促し、それは極めて受動的ではあつたがこゝに商業都市博多の地盤を漸次確立するに至つたのである。

一、興福寺の衆徒と衆中 鈴 本 止 一

衆徒とは僧兵のことであるが、興福寺衆徒は一乘院・大乘院にそれ／＼所屬してゐた。一乘院方の衆徒には有名なものに筒井氏、大乘院方には古市氏があつた大乗院寺社雜事記（以下雜事記と略記す）康正三年四月廿八日條によれば一乘院方の衆徒は二十二名、大乘院方は二十八名の名が見えてゐるが、その人数は年代の上下によつて異動があつた事は勿論である。

その衆徒は彼等の居住地の關係から寺住の衆徒と田舎在住の田舎衆徒に分かれてゐて、その寺住衆徒を衆中と言つたのである。衆中といふ場合には田舎衆徒はその中に含まれない。

衆徒數輩在之、變衆中

但除田舎住人寺住之間□□之

（雜事記、延徳二・十二）

この左傍註を見ると田舎衆徒と衆中は別物である事が

分る。又雜事記長享元年十二月十九日條に

寺住衆徒等帶武具罷向、云講衆、云郷民等追散了、と記し、その翌日廿日條には

昨日帶武具於衆中者悉以可加罪科、

と記してゐる事によつて衆中は寺住衆徒をいふものである事が分る。然し雜事記には衆徒と衆中の兩語は嚴重に區別して使用されてゐないで、屢々混用されてゐる。従つて衆徒即ち衆中と考へられ易いが、それは誤りである。例へば

(1) 明日寺住衆徒春日講、頭竹内亮善致共沙汰(雜事)

記應仁二)

(2) 衆徒春日講、頭光秀致共沙汰(同文明二・正・十一)

(3) 衆中春日講、筒井律師頭役云々(同文明四・正・廿一)

の如く同一の春日講について三様の語が使用されてゐる。(2)と(3)によつて衆徒と衆中の兩語が混用されてゐる事が分るし、(2)の衆徒は(1)の寺住衆徒の略用であらうと考へられる。尙(3)と(1)によつて衆中とは寺住衆徒を指し、田舎衆徒を含まぬものである事が分る。

扱て次に衆中の任務としては社頭・寺門を防禦するといふ事があつた。それは例へば室町時代に頻發した徳政一揆を鎮壓して累の南都に及ばぬ様にするといふのである。又衆中は奈良中の治安を維持するといふ警

察的任務を持つてゐた。この警察的活動の事を當時の言葉では檢斷といつたのであるが、檢斷の問題についてはこゝでは觸れない事とする。その他衆中は春日若宮祭禮や薪能、その他の神事・法會を奉行したのである。

かういふ任務をもつた多數の衆中を統制し、支配する者があつた。それは官符衆徒と云はれるもので、又官符衆徒、官符棟衆等とも云はれてゐる。これは衆中の中から特に選ばれた二十人の器用の仁で、彼等は寺務の代官として活動し、寺務の命をうけて檢斷を行ひ神事・法會を奉行した。任期は三ヶ年といふのが原則であつた。衆中は凡ての點に於てこの官符衆徒の支配をうけたのである。

最後に衆徒の特質ともいふべきものに「蜂起初」といふものがある。これは毎年正月十六日に行はれる古來の儀式で、衆徒蜂起初といはれるものである。蜂起といつても武力的な行動を意味するものではなく、言はゞ衆徒の總會ともいふべきもので、寺住衆徒即ち衆中と田舎衆徒が大湯屋に會合するのである。彼等一堂に相寄り相集つて大いに氣勢を擧げ、懇親を深めるといふ意味のものであつた様である。その會する人数は年により一定してゐないが、長享二年には三十人程明應二年には五十人程參集してゐる。

然し例外的ではあるが正月十六日以外の日にも蜂起初の行はれてゐる事がある。例へば長祿三年六月廿六日、永正四年七月四日に蜂起初があり、而もこの兩年の正月十六日にも蜂起初が行はれてゐて、一年に二度行はれた事になつて、二度目のものは蜂起初ではない譯であるが、この同一年度に於ける兩度の蜂起初には如何なる關係があつたかは今の所明らかにする事が出来ない。又衆徒蜂起初は「衆中蜂起初」と云はれてゐる場合がある。これは田舎衆徒の加はらない寺住衆徒のみのものであつたと思はれる。又「官符衆徒蜂起初」といはれてゐる事もあるが、これは官符衆徒だけのそれと解したのでは意味をなさない。これは官符衆徒が蜂起初の儀式の指導的立場にあつて執行したものと解しては如何であらうか。

兎に角蜂起初は後世迄長く續いて行はれてをり、天正八年織田信長の大和檢地によつて興福寺は決定的に没落したのであるが、それ以後も續行されてゐる。既にこの頃のものには蜂起初の本來の意義を持たないのは勿論であつて、單に形式的な行事として懐古的な存在となつてゐた事であらう。

以上は興福寺の衆徒と衆中の性質を全面的に明らかにしたのは勿論なく、その一斑を述べたにすぎない事をお断りしておきたい。

一、眞木和泉守と久留米藩醫學

王 丸 勇

幕末久留米藩に於ける勤王家にして、維新回天の大業に處した第一人者眞木保臣は、其の好學心竝に識量の大なりし事が、當時久留米に於ける新智識、始めて關方醫學を開いた工藤謙同と親交を結ばしめ、其の醫術に信賴して一家の病人は其の手に委ねると共に、又之に就て海外の狀勢、西洋學術に關する新知識を吸收し、かねて米藩醫學の事にも關心を持つに至つたのである。

従つて弘化三年藩主有馬頼永に上書せる四部個條中「大計之部」には「一、大に學制を立つる事、附り醫學館を建、醫制を定むる事」とある。更に名君頼永の病症を廻る米藩醫學界の軋轡が保臣をして愈々醫制の刷新、醫育の重要性を痛感せしめし事は、後年藩制改革意見を述べし「秘策」中、「病人ありとて動もすれば他藩に醫を請ふこと臣子の情にては可然ことながら國體を破るに近し」とあるに窺ひ得る。文久二年七月伏見寺田屋の變に事挫折し郷里に護送軟禁さるゝや、藩當局に屢々上書し、彼の「維新秘策」、「秘策」の如きもこの拘禁中の執筆と言はれ、この中に於ては殊に

醫學に關して詳しく論述してゐる。

即ち「維新秘策」中には醫者は醫學館にて教育し、其の制度は東肥の制（肥後藩の再春館）を用ふ可しと言ひ、又館の試課を経て開業を許し、在醫の身分を郷士末列とし、其業次第に昇進、侍醫にも拔擢され度しと希望し、官醫にても學術無き者は在醫に繰り下げ、更に子弟の内才氣ある者は學資を十分與へて遊學せしめよと述べ、或は藥園を取立醫學館並に沿邊の郷醫に指揮せしめ、自給自足の上は更に他領にも賣弘めの工夫有る可しと論じ、「秘策」に於ては米藩醫學の衰退を歎き、早く醫學館を立て醫制を嚴にし、名醫を出す可しと言ひ、其の待遇の改善を叫び、子弟の遊學料の如き士大夫の遊資と同じく一年に金二十兩位は賜はる可しと主張し、更に醫道の興隆、更に藥園等の事に言及してゐる。

而して文久三年二月四日幽囚を解かれ、同年四月十三日再度投獄の難に會ふ迄は、米藩に於て保臣の意見が最も行はれた時であり、親しく藩主と膝を交へて語つてゐる程である。しかもこの間三月九日こそ久留米藩醫學館設立を見た日である故、米藩醫學の興隆殊に醫育の促進には、眞木和泉守こそ隠れたる一大恩人と言ふ可きである。

一、明君有馬頼永（義源）公の病症と之を廻る久留米藩醫學の動向

王丸 勇

久留米藩第十代の藩主にして二十五歳にて薨去せる明君有馬頼永（義源）公の病症は、今日の醫學よりみれば腎臟結核と診斷を下す可く、従つて其の豫後不良なる爲め、初め侍醫松下養安等の薦めにより蘭法醫小石元瑞（拙翁）を招きしが、經過果々しからず、爲めに漢法醫等の反對に會ひ御醫百々陸奥守、細川藩醫田中元勝等の診療を乞ふに至り、遂に自説を固持せし松下養安の免職を見て、爲めに一旦興らんとせし蘭法醫學の挫折を來したるが、養安は之に屈せず、自身は漢法醫ながら飽く迄蘭法醫學の取る可き事を認識し、直に弟牛島養朴、子元芳等をして大阪の緒方洪庵塾に學ばしめ、後年の久留米藩新興醫學發展の捨石となりたるものにして、明君頼永の早世を悼むと共に、松下養安の如き敢然所信に邁進せる醫界の先覺に深く敬意を表するものなり。

（本稿は前號に掲載の豫定なりしも編輯子の手違ひにより本號に廻されたことを附記し、講演者に對し深謝します。）



國史學會

今回は毎週末曜日「神皇正統記」講讀會を催し、研究發表は行はなかつた。

東洋史研究會

第三回東洋史研究會を昭和十七年七月〇日第七演習室に於いて行つた。重松教授、日野助教授他學生六名出席。左に研究發表の梗概を發表者の手記に依つて示す。

一、幼方直吉氏「南京木棉興亡史」について

森 道 男

右論文の紹介を兼ね、十八世紀後半より十九世紀初頭に於ける支那棉業と、産業革命寸前の英國に於ける棉業とを比較考察し、如何に支那棉業が支那的特色即ち家内工業として或は又マニユファクチャーとしての支那棉業の特質を取らねばならなかつたかを簡単に論ず

11. Tsung pao (1902) 2 於ける G. Schlegel's  
"The old states in the Island of Sumatra" 2  
0310

辻 豊

その中でシュレーゲルは義淨の教へた南海諸州の十一を取り上げる。彼は、多く高楠氏の考定を反駁しつゝ曰く、「斯くて我々は多くの南海の島々の中、義淨が自ら、足を踏んだのは唯スマトラ東岸もマレイ半島だけであり、彼の著書に現れる多くの國々は唯、彼の傳聞に基くのみである。印度に赴いた多くの頑迷無智なる支那僧侶の中で義淨も正に、その最も無智なるものゝ一人である。彼は訪れた國々の地理や風俗に關しては全く盲目に等しかつた、それ故彼のデータメな記録は、この點で殆んど無價値である。」

そして、婆魯師、未羅遊、莫訶信、訶陵、咀咀、盆盆、婆里、掘倫、佛逝補羅、阿善、未迦漫の十一國は凡べて、スマトラ島、それも東岸のみ、然らずんばマレイ半島、即ち、義淨の足の踏まれた處に在らざるべからずとなし、この條件によつて相當無理な比定を敢行して居る。例へば、第一の婆魯師 (Baros) については、新唐書に明らかに現れて居るスマトラ西半の類

名の國を否定し、十七世紀初葉のポルトガル人、オランダ人の探險地圖などを引つぱり出して、あくまでこれを、スマトラの東岸に求め、Banka 島上に之を求めんとさへして居る。以下同様な方法による。

義淨は、その著で、これらの諸州を數へるに當つて「西より之を數ふれば」と云つて居るのであるが、このことはシュレーゲルによつて「これらの地名は決して地理的なる順序によつて並べられたものではなく彼の所謂最高の問題、即ち、それらの地の住民が、

Mulasarvashivadankāya もしくは Sammitinikāya を奉じて居るか、否かの偶然的な關係によつて並べられて居るに過ぎない」と斷定される。

義淨を頑迷無智とするのは、早計であり、獨斷であり、頑迷である。地理、風俗に關しては、戒律との關係に於いてではあるが、相當詳細、正確に傳へて居るの上、彼は、室利佛逝を再度訪れ、第二回目の滞在は七年の長きに渡つて居る。

その彼の「西より數へる」十一州を、飽くまで、彼自身の通過した地たらざるべからずとなし、更に、その順序を地理的に否定するのは、理解し難い條件である。

以上、南海研究史上初期に屬する先人の一勞作の回顧と紹介に止まるが、以後四十年間に於ける斯學の長

足の進歩の前に、たとへ純然たる過去の遺物ではあるとしても我々は更にその方法論に偉大なる捨石を感じざるを得ない。

### 三、渤海、金の建國と敦化地方の産鐵

日野助教授

(本輯に論文として掲載しあり)

### 四、支那中世に於ける佛寺の金融機關に就いて

重松俊章

支那中世時代に佛教徒の金融機關として各地の巨刹大寺に質庫が設立せられ、それらを典庫(解典庫)、無盡藏(院)、長生錢(庫)などと呼んでゐたことはよく人の知る處である。勿論此等機關の經營者は僧侶であり、その貸出の對手たる典客は佛教信徒が中心ではあつたらうが、引いては一般庶民にも及んでゐたのであるから、支那中世時代の社會政策的金融機關として之等の佛寺質庫は頗る注目するものである。

超世間的な精神生活を營む佛寺伽藍に於ては營利的な金融事業などは當然允るされてない筈だが、宋の沙門道誠の釋氏要覽(卷中)には三寶物の題下で佛の戒律を引いて之等典庫の由來を述べてをる。即ち、

三寶物〇十誦律云。以三佛塔物一。出息聽レ之。

○三供養佛物僧祇云。供養佛華多。聽賣買香油。猶多者。更賣。著無盡財中。即長生錢。謂子母滋生。故無盡。

○五百問云。佛物得賣買取三供養具。

とあり、同書(卷下)『寺院長生錢』の條にも、『律云。無盡財、蓋子母展轉無盡故。』と云ひ、又十誦律や僧祇律の上掲の戒律を引いて無盡錢が長生錢と元々同一のもので、典物出資に因て元金(母)利より息(子)を生じて展轉として長生無盡なるが故に質錢(典庫錢)を無盡錢又は長生錢と呼ぶといふ因由を述べてをる。今日、我國で通用せる無盡といふ金融組織の名稱が之に起源せることは贅言を必要としない。

倍、斯様に佛の戒律に無盡藏錢(質錢)の貸出が許されてあるといふので、古來支那では佛法の社會的施設の一事業として佛寺山門に於て質庫が開設されてゐた。南宋の陸游の老學菴筆記(卷六)によれば、

今僧寺輒作庫。質錢取利。謂之長生庫。至爲鄙惡。予案、梁ノ甄彬。嘗以三束苧。就三長沙寺庫。質錢。後贖苧還。於三苧中。得三金五兩。送還之。則此事亦已久矣。庸僧所爲古今一揆。可二設レ法嚴絶一之矣。

と、之と同様の文は亦、南宋吳曾の能改齋漫錄(卷二)にも見えてゐるが、之等の記事に依ると佛寺の質庫は

既に南北朝の齊、梁時代から汎く流行してゐたものである。降て隋唐時代になると此の風は益々盛んに流行した。中にも隋の開皇(西紀五八〇)の初、左僕射高顯の創立にかゝる彼の有名な三階(佛)教の開祖信法師の住せる長安の眞寂寺(唐代の化度寺)は山内に規模の大きな無盡藏院が置かれてゐたので特に有名である。

太平廣記(卷四九三)に長安の三階教沙門裴玄智の逸話が出てゐるが、それに據ると、唐高祖武德年間(西紀六一八)に三階教僧に信義といふ習禪の沙門があつて、化度寺(三階教祖信の眞寂寺の改稱)に無盡藏(庫)を置き太宗の貞觀(西紀六一七)以後は錢帛金玉を施捨してその額莫大に上ぼつたが、信義が此の監督を擔當した。仍で彼は其の財を三分して、一分は天下の伽藍増修の費に、一分は天下の饑饉・悲田の救濟事業に、一分は其の寺の供養に充てたので善男・善女は競ふて淨財を此處に喜捨して、中には車を連れて錢帛を持込んで來て、その施主の姓名をも告げずに立去る者もあつた。然るに此處に裴玄智と稱する沙門があつて、入寺得度以來戒行精勤、灑掃供養に怠りないこと十數年に及び一山の衆徒は皆な其の德行に服し、遂に彼を擇んで此の無盡藏を監守せしめた處、其後密かに黄金を窃み前後取る所其の數を知らず、後『放二羊

狼領下。置<sup>ヲ</sup>骨狗前頭一自<sup>ヨリ</sup>非<sup>ニ</sup>阿羅漢。安能免<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>。  
偷。』といふ皮肉な詩を題して姿を隠したといふ事である（此の逸話は唐の韋述の西京新記より取つたのである）。

此の隋の信行法師の開基せる眞寂寺は長安の義寧坊にあつて唐高祖武德二年化度寺と改稱され、隋唐兩朝に亘つて信行の開いた三階佛教の本山として名高いものであるが、唐の韋述の兩京新記にも、大體前述の太平廣記と類似の記述がある。即ち、化度寺の山内には無盡藏院がつて元、信行の立てたものである。京城の施捨は後漸く盛で、貞觀以後錢帛金繒積聚して計ふるにたへず、常に名僧をして監藏せしめ、天下伽藍の修理と藏内の所供とにその財を充當した。其中、天下伽藍の修理費は遠く燕・涼・蜀・趙等の所からの需用があつて、毎日貸出の額は計ふるに勝えず、貸出については證文も取らず、但約束の期限に返還するの義務があつた許りだといつてゐる。尙、韋述は唐の則天武后は此の長安化度寺の無盡藏を東都（洛陽）の福先寺に移轉したが、天下の財物が遂に長安化度寺の場合の如く集まらなかつたので止むを得ず之を舊所に還したといつてをる。釋氏要覽（卷下）に

兩京記云。寺（化度）中有三無盡藏。一。則天經序云。

將<sup>モツテ</sup>三親之所<sup>ニ</sup>蓄用兩京之舊邸<sup>一</sup>（？）。莫<sup>レ</sup>不下惣<sup>ニ</sup>結招提之字<sup>一</sup>。咸充<sup>中</sup>無盡之藏上。

とあるので見ると此の時、則天武后は父母の蓄積せる資財と東西兩京の舊宅とを以て東都福先寺などの建立やその無盡藏院の資財等に寄附し盡したものと思はれる。清の王昶の金石粹編（卷七一）に載録せる大唐淨域寺故大德法藏禪師塔銘（序并）によると武后が東都大福先寺の無盡藏を經營した際、如意元年（長壽元年、西紀六九二年）に此の法藏禪師を擧げて『東都大福先寺檢校無盡藏』に任命してをる。然るに法藏禪師は武后の長安年間（西紀七〇一—七〇四）に至つて改めて『檢校化度寺無盡藏』に任ぜられてゐるから、一旦東都福先寺に移した無盡藏が再び長安の化度寺に還移されたのは武后の長安年間の事であつたのが之で判かる。

いづれにしても、唐初の無盡藏（佛寺の典庫）中、最著名のものは隋代以來の傳統を有つ長安三階教の本山化度寺附屬のものに指を屈せねばならぬ。而して全唐文（卷二八）玄宗の禁士女施錢於佛寺令に據ると、化度寺や福先寺の三階教の沙門は無盡藏を創開して、毎年正月四日に護法の名目で天下の士女をして錢を喜捨せしめるを例としたが、その目的は貧弱を救済すると稱し乍ら、其實多くは奸欺に出づるものであるとい

つてをるから、此頃になると頗る此の質庫制度には弊害眼を蔽はしむるものがあつたらしい。仍て玄宗は開元十三年(西紀七一三年)に至つて三階教の破毀禁止令を發すると同時に化度寺の無盡藏をも廢して、その所屬の財物・田宅・六畜などは京城の寺觀に分施することゝした。

併しながら宋の贊寧の宋高僧傳の唐沙門禮宗傳(同書卷五)には洛陽太平寺に典庫(無盡藏)があり、又唐沙門圓觀傳(同書卷二〇)には唐の洛陽慧林寺にも公用の無盡財の設備があつた事を記してゐるから當時三階教の本山化度寺の質庫の外にも各所の寺院に無盡藏庫のあつたことが推測せらるゝ。尙唐代にかゝる典庫が天下各州縣の佛寺に置かれてゐたことはヘリオ氏の敦煌文書(巴里國立圖書館所藏)三四二二號の百姓武光爲(?)が敦煌靈圓寺から糧種の借出證文や、同三四五三號の賈彥昌が同地の龍興寺へ與へた借絹憑等に依つてもその大體が判かるが、此の佛寺の金藏機關の施設は宋代以降つても解庫(解典庫)若くは長生庫などの名に因つて依然流行してゐたことは前に挙げた陸游や吳曾の筆録の文面に依つても明かである。但、元代になると一般社會にも典庫の施設があつて汎く庶民の利用に任かせてゐた事は大元通制條格(卷二七)の解典の條などに見えてゐる。尙、これら典庫の歴史中、

唐代の佛寺典庫の歴史については塚本善階氏の『信行の三階教團と無盡藏に就いて』(宗教研究、新第三卷)や道端良秀氏の『支那佛教寺院の金融事業。―無盡藏に就て』(大谷學報第十四卷、第一號)などの力作を参照され度い。(講演大意)

### 九州支那學會

第十八回例會(十六年六月二十九日)

一、華嚴の人生觀

香川 見悟氏

一、二十四詩品について

近藤 春雄氏

第十九回例會(同十一月九日)

一、謝靈運と佛教

學生 松本 眞昌氏

一、朱子の施政と其倫理思想

楠本 教授

第二十回例會(十七年七月四日)

一、不知之知

永野 助手

### 雜報

一、西洋史助手辛島重義君の南方赴任

學生時代より副手、助手時代を通じて五年間九州史學會委員として功勞大であつた同君は七月初旬、陸軍

軍屬通譯として勇躍南方に赴かれた。八月下旬に泰派遺岩畔機關より編輯子宛に送られた軍事郵便は次のやうである。

〔前略〕此方に来て別段變りはありませんが、日曜がない代りに水曜日曜の午後が休務となります。しかしこれも原則で仕事のある日は夜も出勤です。そして今まで過去の歴史を見て來てゐたのが、めまぐるしい現在の世界情勢を見ることとなり、各國のものを對比してゐる譯です。初めは異様に思はれた寺院も近頃は大分馴れました。又一方には近代的なダンスホールがあり實に多様な要求を複雑に混合してゐます。物資は豊富で殊に皮革と米肉穀類は内地と比較になりません。女の陸軍將校が居ると言ふのも珍らしいでせう。彼等は軍装してよく自轉車等に乗つてゐます。(尤も我々は私服で自動車の時の方が多のですが) (井上記)

史學關係卒業論文題目(昭和十七年九月)

- 一、篤胤の國學に於ける記紀二典の地位 國史專攻 伍 賀 道 一
- 一、芭蕉の思想的的研究 — 風雅の理念及び實踐 — 同 中 林 正 雄

一、幕末の國學と大國隆正

同 宮 下 忠 吉

一、シユライエルマツヘルに於ける民族と國家について

西洋史專攻 本 多 四 郎

一、明末滿洲のガシヤンに就いて

— 清朝創業期社會研究の一齣 —

東洋史專攻 江 島 壽 雄

昭和十七年度四月以降

法文學部史學關係講義題目

史學概論

國史學考 長 沼 教 授

支那歴史研究法 重 松 教 授

日本思想史 竹 岡 教 授

中世神道史 同

演習(世阿彌) 同

國 史 長 沼 教 授

國史概論 同

演習(日本書紀講讀) 同

演習(記錄古文書講讀) 同

西洋史 小 林 講 師

近古史の諸問題

演習(Taine, Essais de critique et d'histoire)

同

東洋史

漢魏時代史  
演習(元代東西交通史)。  
遼代滿洲史  
演習(宋史、食貨志研究)

其他

中世文學概論  
連歌俳諧史  
詩經概説  
英語史  
佛蘭西文學史  
ドイツ精神史  
日本法制史  
西洋法制史(東亞の法律)  
近世歐洲外交史  
西洋倫理學史  
近世教育思想  
基督教思想史(ギリシヤ思想との融合時代)  
日本美術史  
西洋美術史演習  
支那哲學史演習

重松教授

同

日野助教授

同

高木教授

小島助教授

目加田教授

豐田教授

進藤助教授

佐藤助教授

金田教授

武藤助教授

西山教授

新開助教授

松濤教授

佐野教授

矢崎教授

同

楠本教授

九州史學會本年度委員

顧問

長壽吉

委員長

重松俊章

常任委員

長沼賢海

竹岡勝也

日野開三郎

鏡山三郎

小林榮三郎

讚井鐵雄

辛島重義

井上忠

伍賀道一

江島壽雄

本多四郎

川中庄介

島尾敏雄

山口一夫

書記

青木重種(庶務會計)